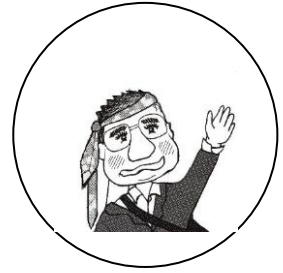


大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

「おっさんたちの旅」 鎌倉⑤

わが輩が巡った日蓮関係の寺院を列記してみよう。

まず、7日に龍口寺、8日光則寺、収玄寺、(鶴岡八幡宮へ)、妙隆寺、日蓮辻説法跡、妙本寺、常栄寺、本覚寺である。この参拝ルートはグズ六にまかせていた。

ぜひ龍ノ口の寺に行きたいと事前に調べてみたら、藤沢市とあった。それで今回は無理だと思っていたら、江ノ島駅前にあった。グズ六は、しっかりと計画に入れていたのである。

1271年9月12日、日蓮は他宗批判により土牢に入れられた。翌日引き出され斬首されそうになったが不思議なことが生じて救われた。

首をはねようとしたところ、江ノ島の方から光が飛んできて、執行人は眼がくらみ、その光で刀は折れてしまった。その時に処刑中止の知らせがはいり助かったという有名な話である。

この神秘的現象に諸説がある。本当に神秘の力がはたらいたとする信者。歴史家は、時の執権北条時宗の妻が妊娠しているので殺生をさけたという説。そもそも幕閣の中に反対論者がいた、などである。いずれの説にしても間一髪で助かったことは事実のようである。

「土牢」(つちろう)ということばは知っていたが、実際に見るとイメージとは違った。龍口寺に御霊窟というのがあって、日蓮が処刑前夜に幽閉された土牢だとされている。鎌倉の窟は、ここだけかと思ったが、至るところにあるらしい。地形的地質的に掘りやすいとの説明であった。牢としてではなく、貯蔵庫として機能していたのではないだろうか。

日蓮は、あの時代を憂慮していた。世の人は飢饉、大地震、疫病に襲われ苦しんでいたのである。京の都の公家たちに対応する能力も気力もなかった。すでに権力は鎌倉にあったからである。ところが鎌倉は「呪われた都」で親族・武士たちが争い、公暁(くぎょう)のような高位の阿闍梨でさえも復讐心に充ちていた。ジャヤワルデネ大統領のブツダのことばが、通用しない時代であった。

そこで、日蓮は辻説法を始め、ダルマ(仏法)に従って世の危機を訴えたのである。当然現状を批判することになるが、それが反感を買うことになった。

ある若い真言宗僧侶が高野山奥の院で、辻説法(法話)らしきことを始めた。批判がましいことではなかったが、すぐさま反発が生じたという話を聞いたことがある。いつの時代も既存の枠を破ると反発があるようだ。

日蓮は、自分の意見をまとめて『立正安国論』を上梓し、鎌倉幕府に提出した。法華經によって、皆が一つの牛車に乗り、国家と人々の救済をはかる大論文である。来世のための念仏でもなく、坐して自己の内部を観る禅でもなく、国家安泰の祈祷でもなく、戒律を守り民衆と一線を引くものでもなく、社会的現実立ち向かおうとする論文であった。

日蓮の思想について特記すべき一つは、他国侵逼（たこくしんびつ）、モンゴル軍の侵略に対する危機意識である。仏教者として、この危機にどのように対処するか、を考えたに違いない。もう一つは、「日本の仏教」を天竺インドに還そうとしたことである。鎌倉時代に至っても、まだ中国からの「輸入仏教」であった。この自覚と発想は凄い。もう一つ加えるなら、個⇒社会ではなく、社会⇒個の逆転的発想である。燃え盛る家では平安に暮らせない。

恩師哲学者Sは、鎌倉に住んでいたが、全く日蓮に関心がなかったように、わが輩には思える。いわゆる鎌倉文化人は道元や親鸞に関心を示していたが、日蓮には素っ気なかった。哲学者Sから「法華經」の名がでた時、わが輩は日蓮の名をだしたが、それは別ものだという表情をしたのを微かに覚えている。おそらく哲学者Sは、哲学の視点で日蓮をみていたのだろう。

正直に告白すると、初めて『立正安国論』を読んだとき、何か深いもの、宗教的哲学的なものがあると思って読んだが、面白いものはなかった。ながらくわが輩が愚人だから、分からなかったと思っていたが、他にもいた。

戦前に、大谷光演（画家・俳人・真宗大谷派法主）が、講演会で『立正安国論』を拙いものと批判したという。それを聞いた清水龍山（立正大学学長）が反論した。論はすべてブツダの経典から引用されている。「その経典を拙いものとするあなたは、一体誰のお弟子ですか！」と。

ちなみに日蓮の内省的なものに関心があるなら、『開目抄』、『観心本尊抄』を読まれたらよいかもしれない。

鎌倉大仏は正午近くになると修学旅行生で混むだろうと思い、急ぎ足で向かった。そのあと光則寺に立ち寄った。山門入口に長谷幼稚園があり、若い母親たちがにぎやかな笑い声をあげていた。小規模な寺院だが、なんとも明るい印象を受けた。

もとは五代執権北条時頼の家臣光則（みつのり）の屋敷であった。日蓮は光則を通じて時頼に『立正安国論』を提出したが、それが裏目にでて佐渡島に流された。弟子の日朗は光則の屋敷（土牢）に捕らえられたが、のちに光則は日蓮に帰依し、光則寺となった。

境内に宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の詩碑があった。賢治と光則寺といかなる関係があるのか不明である。

鎌倉詣の目的の一つは、わが輩のイメージ「日蓮」をぶち壊す、ことであった。それは高校時代に新宗教からうえつけられたものであった。その「日蓮」と「賢治」の間がどうしても埋まらなかった。インドに行って、その中間を埋めることができたが、まだ残影がのこっていた。今回それを壊すことができたか、分からないが、光則寺をでると、再び若い母親たちの笑い声が聞こえた。

日蓮が想う「国土」は、安全でなければならない。そこは笑い声に充ちている。ウクライナの国土に心の平安、笑い声はないだろう。この笑い声の中に、日蓮がいて賢治がいる。